ゐる。最初の3行は破損のため詳には解し難いけれども、2行目の「法王」の上には前述のやうに「大聖」二字があつたことゝ思はれるから、2—3は「大聖法王は善く謙柔を用いる、故に善く萬物を攝化し普ねく群生を救ひ、魔鬼を降伏せしめる」との教義を、道德經に屢出する謙柔の語に關連せしめて說いたものと思はれる。24—27に亙る一節は、景典としての此の殘卷の重要部分と思はれるけれども、今明らかに解し難いのは遺憾である。

こゝにこの殘簡に引用してある道德經の本文に關して注意すべきことは、經には善人之寶を「不善人之所保」とあるのが、これには8行に「不信善之徒所ノ不ル保タ」となつてあることである。「所保」も「所不保」も同義とは認め難い。「所保」については古來諸種の註釋が施され、例へば宋代の蘇注の如きに於ても、「善人寶ハ愚者雖ト不レ能ハ有スル、然而非レバニチ道則チ不レ能ハ安ンズル也、故ニフ曰ニ不善人所トッ保」と述べてある。然も論理として「所不保」でも通じるやうに思はれる。それでこれを同じく敦煌出土で李盛鐸氏の舊藏であつた唐寫本道德經に參照して見ると、それには「善人之寶、不善人之所不レ寶」とあつて、保が寶になつてゐるが、「不」字の存することはこの殘簡と同じである。この異同を如何に解すべきか、道德經の研究者に多少とも興味を與へる問題と思はれる。

要するにこの殘簡の內容は、道德經第六十二章の「道」について說いてある所をそのまゝ取り入れ、それに合致せしめて景教の教義を織込み、道德經も景教も、これについては全く同樣の教であることを說示したものに外ならぬのである。唐代の漢文景典並に關係文獻に於て、景教と道德經との連繫の著しく認められることは、余が先きに⑦景教經典志玄安樂經についてと題して同經を解說した時に、仔細に述べたところであるが、然も上に述べたやうにこの宣元至本經に於て、道德經の一章をその儘に取り入れて、これを景典として說述したのを知つては、誰しも少